

自動詞の派生「受かる」

一、はじめに

動詞の自他という文法概念は、事態の認識と表現に関わる基本的な概念である。動詞の自他の区別は、目的語の有無という統語的な側面や、形態的な派生関係の側面、そして「意図性」や「状態変化」「働きかけ」の有無などの意味的な側面等を手がかりにして解明されてきているが、概してそれぞれの面での自他性が別々に分析され、それぞれの関わりについての考察がまだ十分ではないようである。

本稿は、日本語の動詞の自他における形態と意味との相互的な関わりに関する一つの事例として「受かる」という自動詞を取り上げ、考察したものである。以下の考察を通して、自動詞の派生が単に形態的要因によってのみ生じるのではなく、また、意味的要因によってのみ生じるのでもなく、両者の関わりを通して派生されることを明らかにしたい。

須賀 一好

二、自動詞「受かる」についての先行研究

佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』では、「特に東京に行われて、他の地方ではそれほど使われず、あるいは珍しい云い方とも感じられるようなもの」として「受かる」を取り上げている。そして、そういった種類のものを永田吉太郎『東京方言集』の例から引用し、「受かる」は「試験が受かる」（合格する〔試験に〕）となっている。宮地幸一『ある型動詞の諸相——作家の表現を中心として——』では、「受かる」の用例として次の四例が挙げられている。

○彼自身は東京の中学の受からないことを知っていた。（不良児）
葛西善蔵・大正10

○試験が受かれば受かったで、その準備も考へなければなら
んだから、（蠢く物）同・大正13

○彼は検定の受かった翌年、オダワラのS中学の英語の教師に
なった。（波、父 二ノ二）有三・昭和3

○先生↓秋太郎「遅刻するようじゃ、入学試験は受からないぞ。」

(路傍の石、中学志望)

西尾寅彌「動詞の派生について」は、『受験する』ことを「試験をうける」といい、『合格する』ことを「試験がうかる」という。」と紹介し、「受ける」(文語形は下二段「受く」)は多くの例が古くからあるのに対して、「受かる」の用例は明治以前には見つからないことを指摘している。また、それが多数の自他対応の型への類推によって「受ける」から派生された自動詞であるとし、動詞の自他対応を派生という動的な存在として説明した。

以上のように、これまでの研究によって、(1)「受かる」は近代になって登場した語であること、(2)「受かる」は「受ける」から自他対応の形態上の類推によって派生したものであることの二点が明らかにされている。だが、第一に、「受かる」が「受ける」と自他対応の関係にあるとはいふものの、なぜ「受験する」の意味でしか自他の対応を示さないのか。第二に、「私は入学試験を受けたけれど、受からなかった。」という文が成立することからもわかるように、「試験を受ける」が「受かる」ことを含意しないが、それはなぜなのか。第三に、かつては「試験が受かる」と使われていたが、それがなぜ現在のように「試験に受かる」となったのか。以上の点についての疑問が残る。「受かる」という自動詞は、派生によって生じた多くの自動詞の中でも、特に意味的な面で説明すべき点を残した興味深い存在である。

三、自動詞「受かる」の意味・用法と問題点

かつて「受かる」は「試験が受かる」というように「試験」をガ格で表すこともあったが「試験に受かる」のようにニ格で表すこともあった。大正から昭和にかけての「受ける」と「受かる」は、つぎのような対応関係にあったということである。

- (a) 太郎が 試験を 受ける。—— 太郎に 試験が 受かる。
(b) 太郎が 試験を 受ける。—— 太郎が 試験に 受かる。

現在でも、「受かる」の意味については、ほとんどの国語辞典で「試験に合格する。」のように説明しており大同小異であるが、その文型については、次の用例のように、「試験に受かる」となっている。「試験が受かる」ではない。

○入社試験にも受かり、来春はいよいよ社会人だ。

○希望の大学に受かって、よかったね。

(教育社『現代国語用例辞典』一九九二年 より)

したがって、現在、「受ける」と「受かる」の自他対応は、(b)のような自他対応の関係にあるとしてよいだろう。

多くの国語辞典の中で『三省堂国語辞典(第四版)』(一九九二年)は、「①〔試験に〕合格する。②〔電波が〕受信機にはいる。」

と説明しており、②の用法の存在を示している。これは他の国語辞典には載せられていない珍しい用法である。

「受ける」と「受かる」が自他の対応を示すのは、『三省堂国語辞典』の〈電波が〉受信機にはいる。を除外と、次に示す「受ける」の意味・用法の中では、④の「自分に向けられた、ある行為に応じる。」の中での「試験」の場合だけであり、「授業」や「手術」にはない「試験」の持つ特殊性が「受かる」という自動詞を派生させていることがわかる。

①「受ける」 自分の方にむかってくるものをとる。〈句例〉受けて立つ。風を受ける。質問を受ける。電話を受ける。身を受ける。真に受ける。

②「受ける」 ほかからの行為や作用などの影響がある。〈句例〉ショックを受ける。被害を受ける。

③「受ける」 なにかよいものをもらう。いただく。〈句例〉祝福を受ける。賞を受ける。生を受ける。

④「受ける」 自分に向けられた、ある行為に応じる。〈句例〉授業を受ける。試験を受ける。手術を受ける。

⑤「受ける」 人気を集める。好評を得る。〈句例〉大衆に受ける。しゃれが受ける。

⑥「受ける・請ける」 なにかすることを承知する。〈句例〉工事を請ける。〈文例〉おさそいをお受けします。

（三省堂『例解新国語辞典 第四版』一九九三年 による）

次に、自他の対応における意味的な関係を見てみよう。「受ける―受かる」と同じ自他対応の型に属する次の例では、他動詞文の行為の達成は自動詞文の意味する事態の出現を意味する。

a ミルクを温めた。
b ミルクが温まった。

a 温度を上げた。
b 温度が上がった。

a クギを曲げた。
b クギが曲がった。

a 布を青く染めた。
b 布が青く染まった。

a エンジンを止めた。
b エンジンが止まった。

a 色を混ぜた。
b 色が混ざった。

「ミルクを温めた。」は「ミルクが温まった。」ことを意味する。ただし、「薪を燃やしたけれど、燃えなかった。」という表現が成り立ち得るように、「ミルクを温めたが、温まらなかった。」という状況もあり得るだろう。これは、他動詞文の意味する行為が結果の達成を含まないということが、状況しだいではあり得るということである。こうした解釈は、〈他動詞の意味する行為をしたが、対応する自動詞の意味する事態が成立しなかった〉という文が成立するか否かという条件のもとでの解釈である。「ミルクを温めた。」というように単独の他動詞文を解釈するならば、どれも他動詞の意味する行為の達成が自動詞の意味する事態の出現を含蓄する。

また、「他動詞形＋テアル」は、行為が完了した後何らかの結果や効果が残っていることを表すが、「ミルクを温めてある」ならば

「ミルクは温まっている」ことになる。

これに対して「試験を受ける」は、「試験を受けたけれど、受からなかった。」が成立するのはもとより、「試験を受けた」単独でも「試験に受かった」ことを含意しない。また、「試験を受けてある」も「受かる」ことではない。これは、他の自己対応と比べると異例なものと言える。「受ける」行為が「受かる」ことを含意しないのに、なぜ「受かる」が派生されたのか。「受ける」と「受かる」は自己の対応なのか。この問題は、「受ける―受かる」という対応が「試験」に関してのみ成り立つことと無関係ではないはずである。
(「電波が」受信機にはいる)の用法はひとまず除く。

四、自動詞の派生における形態的要因と意味的要因

「受ける」は、形態的には「温める―温まる」型自己対応の他動詞側に位置し、自動詞「受かる」を派生する可能性を有している。しかし、ヲ格名詞を伴う動詞が形態的に自動詞を派生する可能性を有しているからといって、すべてが自動詞形を派生するわけではない。統語的・形態的には同じ条件にありながら、「比べる」「告げる」「食べる」「調べる」などの動詞は、「比べる」「告がる」「食ばる」「調ばる」という自動詞を派生していない。これに対して、「炒める」は「炒まる」という自動詞を派生している。これは、炒めた結果の状態を、対象物の状態変化に焦点を当てて表現したものである。「炒まる」が派生されたのは、このような認識が可能であり、かつ必要とされたためである。

対応する自動詞のある(以下、「有対」と呼ぶ)「温める」「曲げる」「上げる」「染める」「止める」「混ざる」「炒める」と、対応する自動詞のない(以下「無対」と呼ぶ)「比べる」「告げる」「食べる」「調べる」とを比べると、有対の動詞が客体の状態変化を引き起こすことに意味的な焦点があるのに対して、無対の動詞はそうした意味を持たず、概して人の行為のありさまを表現することに意味的な焦点がある点に違いが認められる。こうした点から見ると、「受ける」は「試験を受ける」の用法も含めて、客体の状態変化を引き起こすといった意味を持っていない。「受ける」は意味的には自動詞を派生し得る環境にはない。「受ける」は無対の動詞でなければならぬはずなのである。

「受ける」の意味することは、意志的にせよ非意志的にせよ、自分の方に向かってくる事物をとるということである。このような意味を表す動詞は、一般的には次に示すように自動詞形である。

- (1) 教える―教わる 授ける―授かる 預ける―預かる
貸す―借りる ことづける―ことづかる
言いつける―言いつかる

- (2) 着せる―着る 見せる―見る 被せる―被る
浴びせる―浴びる

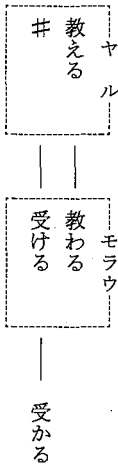
(1)の対応は、「やる」と「もらう」の関係を共通して持っているもので、自動詞側の動詞(「教わる」「等」)は「受動詞」とも呼ばれる。

これらの対応の中で「受ける」が位置するのは、その意味的なあり方から「教える」側ではなく「教わる」側である。

また、(2)の対応においても、形態的に自動詞側にある動詞は、事物を自分の方に受けとるという意味を表す。これらの例においても「受ける」の意味的な位置は、「着る」側にある。

以上のように、意味の点では、動詞「受ける」は、自己対応において自動詞形のほうがふさわしいのである。それは「受ける」の用法のうちの「祝福を受ける」「賞を受ける」「生を受ける」といった用法が「授かる」でも言い換えることができることや、「電話を受ける」が「電話をかける」ことではなく「電話がかかる」ことに対応した行為であることにも現れている。

ところが動詞「受ける」は、意味的に、「教わる」や「授かる」などと同じく「もらう」側になりながら、形態的には「教える」「授ける」などと同じ「やる」側、即ち「与える」意味を表す側の動詞の形態を有しているのである。意味を基準にして図示すれば次のような関係になり、「教える」「教わる」等の対応とは、意味と形態との関係においてズレていることがわかる。



この図の井の部分は実際には存在しないが、「試験」を与える行為、つまり「試験をする」ことに相当する部分である。意味的には

「試験をする」ことを「ウケル」、「受験する」ことを「ウカル」と言う方が「教える」等の動詞群との形態的な整合性があることになる。しかし、たまたま「受ける」はそうではなかったということである。このように、「試験を受ける」以外の用法で「受ける」が「受かる」を派生していないのは、「受ける」が形態的には自動詞形を派生し得る環境にありながら、意味的にはその環境になかったためである。逆に言うと、「試験を受ける」に限って「受かる」を派生したのは、形態的に自動詞を派生できる環境にあり、また意味的にも派生し得る環境を備えていたということである。

では、「試験を受ける」が「試験に受かる」を派生した意味的環境とは何だろうか。この問題を検討する前に、かつては「試験が受かる」というように「試験」をガ格で示していたことと、検討を保留しておいた（「電波が」受信機にはいる）という「受かる」の意味・用法について検討する。

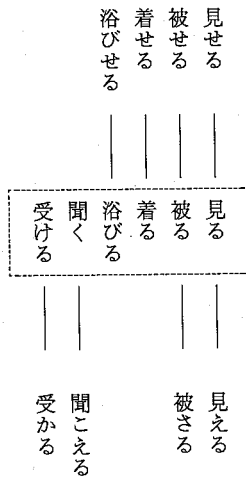
五、もう一つの自己対応との関係

「受かる」に（「電波が」受信機にはいる）という意味・用法があるならば、それは次のように、「試験を受ける」と「試験が受かる」の対応関係と同じになるはずである。そして、この対応関係は、「見る」「見える」「聞く」「聞こえる」の自己対応と同じなのである。

太郎が 試験を 受ける。 — 太郎に 試験が 受かる。
受信機が 電波を 受ける。 — 受信機に 電波が 受かる。

太郎が 星を 見る。 — 太郎に 星が 見える。
 太郎が 虫の音を 聞く。 — 太郎に 虫の音が 聞こえる。

「見る」「聞く」に共通する意味は、事物を自分の方に受けとるということである。これらの動詞に「被る」「着る」「浴びる」を加えて、それぞれの対応関係を図示すると、次のようになる。



「受ける」という動詞は、意味的には「見る」の類に含まれる。「受信機が電波を受ける」の「受ける」は「見る」「聞く」「被る」に相当し、「受信機に電波が受かる」の「受かる」は「見える」「聞こえる」「被さる」に相当する。このように、(「電波が」受信機にはいる)という意味の「受かる」は、「見る」「見える」型自他対応への類推から、「見える」に相当する自動詞として派生されたものと言える。

かつて「試験に受かる」ではなく、「試験が受かる」と表現されたのも、このような類推によるものと考えられる。既存の「見る」「見

える」等の自他対応の存在は、「受ける」が他動詞として位置し、対応する自動詞を派生するための有力な要因になったはずである。そのようにして、既存の自他対応への類推から派生したのが「試験が受かる」である。だが、これが定着しなかったのもやはり意味的な理由によるものと考えられる。「電波」の場合、受信装置を働かせ、電波を受信することが「電波を受ける」である。「受ける」という行為は、「電波を受ける」ことができることで達成される。そのようにして受信できたことが「受かる」である。「受ける」という行為の成立が行為の達成なのであり、そのことを、対象である「電波」の状態変化として認識し、表現したのが「電波が受かる」なのである。

「電波」の場合は、「受けた」ことが「受かった」ことであるが、「試験」の場合は「受けた」ことが「受かった」ことにはならない。「試験を受ける」という行為は、行為の成立が最終的な達成なのではない。その点で「試験を受ける」——「試験が受かる」という関係は、既存の「星を見る」——「星が見える」、「帽子を被る」——「帽子が被さる」、「音を聞く」——「音が聞こえる」の意味的な関係（「見た」ことが「見えた」ことを含意するというように、他動詞の意味する行為の成立が自動詞の意味する事態の出現という関係）と合致しない。

また、「見る」——「見える」等の対応においては、自動詞文の表す事態は対象物の出来事として捉えられているが、「試験を受ける」においては、「受けた」結果、「試験」がどうなるということではなく、動作主がどうなったかということに意味的な焦点がある。この点でも、既存の「見る」——「見える」等の対応とは異なるところが

ある。結局、このような違いによって「試験が受かる」という用法は定着しなかったのだと考えられる。

だが「授業を受ける」や「手術を受ける」には派生しなかった「受かる」が、「試験を受ける」に派生したのも事実である。それは「試験が受かる」という形で派生し、後には「試験に受かる」という形で定着した。その理由は何なのだろうか。

「授業」「手術」「試験」は、これらを「受け」た結果、これらの状態が変化するわけではない。その点では同じである。しかし行為の達成のとらえ方に違いがある。「授業」や「手術」の場合は、それらを受容すること、あるいは経験することが「受ける」ことであり、行為・経験の成立のみが問題にされる。しかし、「試験」の場合、「受ける」行為の成立だけでなく、「受けた」人がその結果どうなったかということが問題にされる。試験を受けて、それに合格することが「受ける」行為の達成なのである。

ただし、行為が最終的に達成されるかどうか、つまり、合格するかどうかは「受ける」行為が制御できることではなく、「試験をする」(与える)側が決定することである。したがって、「受ける」行為が成立しても、合格することは含意されずに、行為の成立と目的の達成とは分離した二つの事態として存在することになる。それは、「宝くじを買う」ことと「宝くじに当たる」こととの関係と同様である。「宝くじを買う」行為の成立は「宝くじに当たる」ことを含意していない。「宝くじを買う」ことは、単に「宝くじに当たる」ために必要な、前提となる行為であるに過ぎず、意味的な焦点は、行為の達成としての当たるかどうかにある。

以上のように、「試験を受ける」行為が最終的な達成を含意していないにも関わらず自動詞形「受かる」を派生したのは、「受ける」行為のあり方が行為の結果の達成を相当に左右するからであり、その行為の達成という事態(「合格する」ということ)に意味的な焦点があるからであることがわかる。一般的に、典型的な自己対応にあっては、他動詞文の意味する行為の目的の達成、あるいは結果の出現が、自動詞文の意味する事態の出現であるが、「試験」に合格するということは、まさに他動詞文の意味する行為の目的の達成にあたる。「受かる」が「合格する」ことを意味することは、その点において一般的な自己対応の意味的な関係に合致しているのである。

このように、「受かる」が「合格する」という意味を表すことは、一般的な自己対応における意味的關係の中に収まることである。それは自動詞形「受かる」の存在を意味的に支え、定着させる要因である。しかし、「試験が受かる」というように「試験」をガ格で示すことは、「受かる」を「見る」―「見える」型自己対応の自動詞形として位置づけることになり、意味的に不都合なのであった。こうした不都合を解消するとともに自動詞形「受かる」の存在を安定させたのが、「試験」をニ格で表すことだったと考えられるのである。それは、「受ける」―「受かる」という対応が「見る」―「見える」型対応と離れるということであり、また「受かる」と対義語の關係にある「試験に落ちる」と意味・構文的な枠組みを共通にすることによって、対象の変化ではなく、主体の変化を意味する自動詞としての安定した位置を獲得するということなのである。

六、おわりに

「受かる」は「受ける」からの派生によって生じた自動詞である。その派生のされ方は単語レベルの形態的要因だけでは説明できず、意味的な要因と自他の構文的な要因が関わっていることがわかった。日本語の動詞の自他の問題を解明するためには、意味の領域での考察が必要であるとともに、自他の対応のあり方に改めて注目することが必要であるように思われる。本稿で扱った例は、動詞の自他に関する興味深い一例に過ぎないが、日本語の動詞の自他に関する今後の研究のための一試論としたい。

注

1 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法〈増補版〉』P一二二～一二四 くらしお出版一九八三年復刊。

2 宮地幸一『ある型動詞の諸相——作家の表現を中心として——』P九〇～九一 桜楓社 一九八五年。なお、引用にあたっては、用例の所在を示すページは省略した。

3 西尾寅彌『動詞の派生について』『国語学』第17集。一九五四年。(西尾寅彌『現代語の語彙』明治書院、所収。須賀・早津編『動詞の自他』ひつじ書房、に再録。)

4 この問題については、宮島達夫「ドアをあけたが、あかなかった——動詞の意味における〈結果性〉——」(『計量国語学』14巻8号 一九八五年)、森田良行『誤用文の分析と研究——日

本語学への提言——(明治書院 一九八五年)、池上嘉彦『英文法』を考える』P一〇三～一二六(筑摩書房 一九九一年)等を参照。

5 テアル形については、多くの言及がなされているが、森田良行『動詞の意味論的文法研究』(明治書院 一九九四年)、益岡隆志『命題の文法——日本語文法序説』(くらしお出版 一九八七年)、影山太郎『動詞意味論』P一八六～一八九(くらしお出版 一九九六年)等を参照。

6 杉本 武「二格をとる自動詞」(『日本語のヴォイスと他動性』くらしお出版 一九九一年 所収) 参照。

7 このような形態論上の基準と統語論上の基準とが一致しないように見える例でも、形態上自動詞の側にある動詞が、意味的に自動詞であることについては、ウェスリー・M・ヤコブセン「他動性とプロトタイプ論」(『日本語学の新展開』くらしお出版 一九八九年 所収。当該箇所は須賀・早津編『動詞の自他』ひつじ書房、に再録。) 参照。